

## 摘出術を行った腓腹筋筋内血腫の2例

至学館大学短期大学部 アスレティックトレーナー専攻科  
近藤精司 東 千夏 山根真紀

トヨタ記念病院 整形外科  
高松浩一

伊藤整形外科  
伊藤隆安

### 【はじめに】

筋挫傷や肉離れの後に生じた大腿四頭筋筋内血腫の報告は散見されるが、腓腹筋筋内血腫の報告は殆ど無い。我々は、スポーツ選手に生じた腓腹筋筋内血腫の2例に対して血腫除去術を行い、良好な結果を得たので文献的考察を加え報告する。

### 【症例1】

25歳、女性、実業団女子バスケットボール部の選手。  
現病歴：練習中、ジャンプの着地時に相手選手と交錯して受傷、トレーナーにより受傷直後にRICE処置がおこなわれ、腓腹筋肉離れの評価で保存的治療を受けた。しかし、受傷後3週間経過しても歩行時痛が強いために練習に復帰できず、初診した。  
初診時所見：右下腿内側に腫脹、硬結、圧痛あり、膝伸展位で足関節背屈が0度と制限されており、跛行を認めた。MRIの画像では、冠状断像で腓腹筋内側頭内にT1強調像で等輝度、T2強調像で高輝度の約2.5 X 4cmの腫瘤を認めた(図1.A)。T2、横断像でも筋肉内に約2.5 X 2.5cmの腫瘤を認めた(図1.B)。



図1.A.  
T1強調冠状断像；右腓腹筋内側頭内に腫瘤を認める。

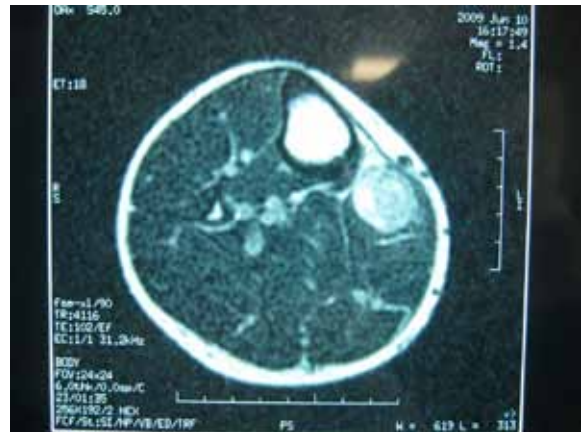


図1：B.T2強調横断像

経過：3週間経過しても症状が軽快する傾向が殆どなく、チーム事情により確実な早期復帰が必要であったため、受傷後4週目に血腫除去術を施行した。局所麻酔下、硬結直上に約2cmの皮切を加え、筋膜を長軸方向に切開して血腫を除去し、出血の無いことを確認して閉創した。手術の翌日には痛みが軽減し、可動域が改善、通常の歩行が可能となった。術後3週間で練習に復帰、術後1年経過した時点で局所症状および再発はなかった。

### 【症例2】

高校2年生、男性、陸上部に所属。

現病歴：自転車で転倒して受傷した。右膝内側後方に痛みあり、受傷後3週間経過しても症状が軽減せず、初診した。

初診時所見：荷重時に膝内側後方の痛みあり、膝蓋跳動なし、膝関節動揺性は認めなかった。膝関節伸展は-10度と軽度制限されていた。MRI上、膝高部の腓腹筋内側頭内に2.5 X 3 X 4cmの腫瘤を認めた(図2.A,B)。



- 2) 竹本東希ほか：スポーツ選手の大腿部筋肉内血腫の3例．東海スポーツ傷害研究会会誌，25:51-53,2007.
- 3) 山下琢ほか：超音波ガイド下に関節鏡機械を用いて除去した大腿四頭筋血腫．日本整形外科超音波研究会会誌，15:33-38,2003.
- 4) 與田正樹ほか：鏡視下手術を施行した大腿四頭筋血腫の1例．東海スポーツ傷害研究会会誌，30:23-25,2012.
- 5) 立石智彦ほか：血腫に対するウロキナーゼによる局所注入療法の治療経験．整スポ会誌，22:258-261,2002.
- 6) 島田信弘ほか：筋肉内血腫を生じた大腿部挫傷の治療経験．整スポ会誌，27:59,2007.
- 7) Aronen JG et al : Quadriceps contusions: clinical results of immediate immobilization in 120 degrees of knee flexion.Clin J Sport Med, 16:383-7,2006.